



@i\_soragasuki

〈二年〉

島流しの彼女と海	/	上野	新
豚	/	小田	竣也
ガラス瓶の中の王子様	/	原田	和来

時刻は朝焼けが町を支配する六時三十分頃のこと。

僕と、僕の恋人である蓮城沙苗は、とある浜辺を歩いていて。

「やあ〜ッ、ちよつとワクワクしてきちゃったね」

彼女——沙苗は声を弾ませて僕の散歩先をくるくると踊りを踊るかのような動作を魅せながら歩いていた。

そんな彼女の右手には、コルクで栓をされ、中に丁寧に折りたたまれた手紙の入ったガラスの瓶が握られている。

僕はそのガラス瓶と、空き瓶を持

った楽しそうに笑う彼女を見比べながら、曖昧に笑うしかなかった。

『ボトルメールってあるじゃない？』

——時は遡る事つい先日。事の発端となった沙苗とのやり取りの最初にあたる彼女の言葉を、僕の脳は思い起こしていた。

「ああ、あの……手紙書いて、瓶に入れて、海に放流するっていうやつ？」

僕は「ボトルメール」がどういった代物だったかを思い出しながら、彼女の唐突な言葉へと返答していた。

「そうそうそれぞれ。ちよつとさ、やってみたくない？」

彼女はいつもこうだ。何か、自分にとって「いいこと」を思いつくと、すぐにそれを僕に伴って実行しようとする。僕は、彼女のそういうところに惹かれたのだ。

「うん、面白そうだね。でも、正直だれかが拾ってくれる……どころか、本当にどこかに漂着するかも分かんないよ？」

そう、ボトルメールとは自分の知らない何処かの誰かに宛てた手紙を入れた瓶などを海に放流する行為なのである。つまりは、甘酸っぱ

い恋愛ドラマなどでよくあるようにどこか遠い地にポトルメールが辿り着いて、それが誰かに拾われて読まれるだとか、そもそもそれ以前に「どこかの地」に辿り着くかどうかすらも分かったものではないのだ。

「いや、別に誰かに拾ってもらったかそういうのはいいわ、うん」

……そう、彼女はこういう人間だった。

やりたいと思ったことをやって、そこに付いてくる結果などは二の次である。

それが彼女——蓮城沙苗という

人間なのだということは、誰よりも僕がよく知っていることだった。

「どうしたの？ ぼーっとして」

沙苗の呼びかける声で、はっと現実へと意識が引き戻される。

僕は慌てて首を振って、「なんでもないよ」と心配をかけさせない為の言葉を吐いた。

彼女はもう既に瓶を海に流す体制に入っているらしく、波打ち際にしゃがみ込んで、瓶を今まさにその白い手から離さんとしていた。

そして、手紙の詰められた瓶は放たれる。

彼女の手を離れた瓶は、そのまま波に身を任せるかのように揺られ、流されていく。僕たちはその様子をただ黙って見ていた。

が、しかし。波に攫われていく瓶は、ある程度海に漂った後に、突然ぴたりとその動きを止めた。

「……？」

あまりにも不自然な挙動に、僕達は怪訝な表情で瓶を見つめる。周りの波は依然寄せては引いていく自然な動きを繰り返している。波に包まれたその瓶だけが、そこで静止したまま微動だにしない。

まるで、僕達の放流した瓶だけが、

世界から取り残されてしまったかのように。

「あれ。瓶動かなくなっちゃったね。どうしよう」

彼女はそんな異様な光景を前にしても、異様なほどにいつも通りだった。

普通こんな不自然な光景を目にすれば、僕のように戸惑ってしまうはずだが、まあ彼女はそんな人間だ。

瓶が静止したままおよそ五分は経っただろうか。

あまりにも奇妙な挙動の瓶を見つめている僕の体感時間はやたらと長く感じたが、おそらく実際に経

過した時間はほんの数分程である。

その数分が経過した後のことであつた。

瓶に、動きが生じたのを僕は見逃さなかつた。

「あつ!? う、動い……!?」

「……」

僕が驚嘆の声を挙げている最中にも、沙苗はじつ、と瓶を見つめて黙りこくつたままだ。

そのうちにも瓶は、最初に見せた微細な動きを徐々に大きなものへと変貌させていき、いよいよ誰が見ても瓶の動きは確実なものへとなつていった。

ただし、その動きは波に揺られていようなごく自然なものではない。

“振動”しているのだ。ぶるぶる、ぶるぶると、揺られているのではなく、振動している。

先程からまるで物理法則など存在しないかのような動きを見せる手紙の入った瓶に、僕は当惑しっぱなしだった。

しかし、そんな僕のことなどお構いなしに瓶はぶるぶると振動し続けているし、彼女も依然黙したままその様子を見守り続けている。と、そんな僕と沙苗の眼前に――

女神が現れた。

……そう、女神が現れたのだ。

僕自身何を言っているのかよく解らないが、実際に目の前で起こった出来事なのである。目の前でわけのわからないことが起こってしまったのだから、許してほしい。

お詫びと言ってはなんだが、もう少し詳細に起こったことを表現してみようと思う。

振動を起こしていた瓶が突然浮き上がったかと思うと、その下——つまり海の中から、女性が姿を現したのだ。

古代のギリシヤ人が着用してい

たような服装に、美しいブロンドの髪を持つ綺麗な女性。その頭上には天使の特徴によく見られる光り輝く輪っかが浮いている。

これは完全に女神的なアレだと、そう思った。

『——あなたたちが落としたのは、金の瓶ですか？ それとも、銀の瓶ですか？』

ふいに、女神が僕たちに問いを投げ掛けた。どこにしまっていたのか、輝く金色の瓶と光沢を持つ銀色の瓶を取り出して、僕たちに見せる。

ご丁寧に中身の手紙も同じく、金と銀に輝いている。すごい。これも童

話なんかでよく見聞きしたアレだ。女神のテンプレだ。

これはおそらくテンプレ的に考えると、欲を出して金、もしくは銀の瓶を選んでしまえば『あなたは強欲なので何もあげません』と言われ、そのまま去られてしまうだろう。

というかそもそもそれは普通に窃盗罪にあたるのではないかと欲を出したのであげません、ついでに元々の所持品も私がついていきます、だなんて、よく考えればかなりおかしい話だし傲慢だ。

提示された選択肢に対して考えを巡らせているうちに勝手になん

だか憤りを覚え始めた僕は気づかなかった。隣で一言も発さずにずっと黙っていた沙苗の様子に。

「――姉さん……」

ぼつり、と、彼女が零した一言を、僕の脳が正しく理解し処理するには少しの時間を要した。

姉さん。姉さんと言っただろうか。

姉さんとは姉のことを指す言葉だ。

姉とは同じ親から生まれた年上の

女を指す言葉だ。つまり、この女神

が、彼女の、姉ということに、なる

……。

たしかに沙苗はとても綺麗な女性だ。それこそ女神と並べてみたら

て勝るとも劣らない女性だ。しかし、彼女の髪はしつとりとした黒髪だし、れっきとした日本人の筈だ。顔立ちだって、違う筈だ。

しかし、隣の沙苗と眼前の女神を見比べていると、二人――いや、一人と一柱か――の顔立ちには、相違点があることに気づいた。

すつと通った鼻筋。薄く小さな唇。

そして、美しい緑色の瞳。

よく見れば、近い顔立ちだ。いや、

近いというか似ている。

『妹よ……お久しぶりですね』

彼女らの類似点に再び驚愕していた僕の耳に、女神の美しい声が響

いた。

その声は沙苗のことを妹だと認めるものだった。

「姉さん……今までどこに行ってたのよ！」

『妹よ、許してほしいとは言いません。ですが、仕方なかったのです。

我々水棲神<sup>すいせいがみ</sup>を存続させる為には……

……あなたを人間界に送り出すしか

……』

なんだか僕が置いてけぼりにされて、話がとんとんと続いている。

「でも……つ、寂しかった！ 姉さんと離れ離れになって、私……」

普段はあまり感情を表に出さな

い沙苗の慟哭どうこくによる訴えは、困惑しきっている僕の耳を通じて脳へと響く。しかしそれでも、未だ困惑に引つ張られて、僕は状況を上手く理解しきることはできないでいた。

『妹よ……』

「姉さん……」

あまりの急展開。あまりの超展開。ずっと僕だけが置いてけぼりを喰らっているが、何やらいい雰囲気になっっているようだったので、空気を読んで口を挟まないでいる。

『妹……ッ！』

「姉さん……ッ！」

じっとお互い見つめ合っていた

膠着状態こうちやくが解け、二人は同時に駆け出し、浜辺でひしりと抱擁し合った。

僕は未だについていけないのだが、どうやら上手い事和解したらしい。

半ば呆然としながら僕は、ほぼ無意識のうちに拍手をしていた。どうやら丸く収まったらしいので、とりあえず拍手をしておこうという、身体に染み付いた判断の所為だろう。

その拍手の音で、漸く僕がいることを思い出したのであるう、抱擁していた二人の美しい女ははつとこちらに視線を寄越よこした。

「ご、ごめんね、変などこ見せちゃって……」

赤面しながら目線を泳がせる彼女の姿を見ながら、珍しいものを見たな、と胸中で独り言ちる。いや、そもそも海の中から女神のような者が現れたことが珍しいものではないのだが。

『そういえば、妹よ。このお方は？』  
「私の彼氏よ」

今更僕のことについて沙苗に問うた女神は、彼女からの返答を受けて目をまあるくさせた。そして、丸くさせた目で僕と沙苗を交互に見やり始める。

まあ、生き別れていた妹と感動の再開を果たした直後にその恋人を紹介されれば、おそらく誰だってそんな反応を示すのだろう。

『えっウソ!? 趣味悪ッ』

「オイどういう意味だコラ」

この女神、もしかすると結構失礼なヤツだな?

「ちよっと姉さん! 私の彼氏けな貶

すのやめてちょうだい! それに、

いずれは姉さんの義弟おとうとになるんだ

から!」

……そういえば完全に忘れていたが、沙苗が本当にこの女神の妹なのであれば、その恋人である僕は、

いずれ彼女と結婚し、そして。

——そして、この女神の義弟、つまり身内になるのだ。

『……あ』

僕と同じくしてそのことに気づいたらしい女神は、随分と間の抜けた声を漏らした。そして、その表情は険しいものに変化していき、完璧な美貌がしわくちやになる。

『……わ、わたしは認めないんだからア——!!』

女神はそう叫ぶと少しだけ浮遊し、ムーンウォークもかくやという程の滑らかさと速度を以て後退した。

そのまま海の中へとまるで逆再生のように沈んでいき、姿が完全に消え——る前に、女神は懐から取り出した元の瓶をもの凄くスピードで僕に投げつける。投げつけられた瓶は僕の額に直撃。会心の一撃を喰らった僕は、その場に背中から倒れた。

「姉さ————ん!!」

沙苗はというと、海に帰ってしまった姉に手を伸ばして叫びを上げていた。せめて僕の心配を先にしてくれよ、と思ったが、久々に再会した肉親なのだから仕方ない。と、自分を納得させながら僕の意識は暗



転していくのだった。

これが、僕と彼女と、その姉である水の女神との壮絶な闘争の序章である。

手で温度を確認して、十分温かくなってから、シャワーを体に浴びせると、肩や、背中や、左の二の腕や、ふとももや、冷たい浴槽の底についた足先が、じんわりと温まってきた。冷えていた風呂場も、シャワーの蒸気で段々温まっていく。波形のカーテンを浴槽の内側に入れて、水しぶきが飛び散らないようにしながら気持ちのいいシャワーをしばらく堪能する。体がすっかり温かくなったら、頭と体を洗い、リンスを付ける。すべて洗い流した後も、この温かい気持ちのいいシャワーを止める気にならず、肩から背中、腕にか

けて、まんべんなく体を温める。ようやく上がる気になって、浴槽をざっと流し、右側のレバーを回してシャワーを止める。カーテンは閉じたまま、後ろの棚に置いておいたタオルをとって頭をごしごと拭き、体もきれいに拭き上げる。拭き終わったらカーテンを開け、浴槽から出てバスマットに上がる。足の裏の水がバスマットに吸引される一瞬の感覚がとても気持ちよく感じられる。拭き残しを拭き上げ、足の裏が乾いたら片足だけ前に出し、衣服を取る。靴下以外すべて身に着けて、ようやく浴室を出る。浴室を出ると、暗い

室内にベッドの上で布団をかぶって寝ている兄の後ろ姿が見えた。

ホテルを出ると、午前五時の冷たい空気が体を震わせた。空を見るとまだ暗く、星が少しだけ見える。エントランス手前はロータリーになっているが、停まっている車もないし、やってくる気配もない。ロータリーともつながっている右の宿泊者用の駐車場はほとんど満車で、時間が止まったように静けさに包まれている。身動き一つせず固まった多くの車たちを眺めていると、駐車場全体が静かに眠っているように見えて不思議な感覚になる。ロータリ

ーに沿って左手の道を少し進み、向かいの枯れ芝生へ渡る。一段下は簡素な駐車場となっていて、下へ降りるための階段が両端にある。この駐車場は宿泊者向けのそれとは異なり今の時間帯では空きが多い。空っぽの空間がそこに広がっている。階段を降り駐車場を抜ける。こちら一帯のメインの一本道に出るが、右も左も車のやってくる気配がない。車道を渡り、林と歩道を分ける木製の柵に沿って進むと、すぐに柵の切れる場所に着く。そこから見える景色には、木のアーチと、下へ降りる階段と、その奥に、宝石のように黒く

輝く海があった。

踊り場のある三つに分かれた長い階段を降り、海の全景を見る。黒く輝く広大な海原はほとんど風いでおり、波もあまり立っていない。緩やかに曲がっている水平線と、それから分かる地球の巨大さ。美しさ と得体のしれない恐ろしさを湛えた海は、自然の神秘さを感じるには十分すぎるものだった。段差の大きいコンクリートを一段ずつ降り、湿った砂浜に足を下ろす。足を下ろした砂浜からは、スニーカーを通して軋む感覚が伝わってきた。砂浜はみたところ綺麗にされており、ゴミは

あまりなかった。コンクリートとは違い歩くと足にまとわりつくような砂浜を渡り、波打ち際に着く。ここまで来ると寄せては帰る小さい波の音が聞こえてくる。傾斜した波打ち際を、穏やかな海が寝息を立てるように上がっては、引いていく。波の上がるときは水が薄く引き伸ばされ、引いていくときは白い泡を抱えながら、下に巻き込むように回収する。黒みがかった砂浜を波が何度も塗り替えていき、巻き込みながら引いていくその美しい様は何度でも見ることができた。

砂浜を散歩していると、波打ち際

に瓶が突き刺さっているのが見え  
た。メッセージボトルかと思ったが、  
近寄ってみると中身が入っていな  
かった。おそらくただのガラス瓶な  
のだと思われる。誰かが中のメッセ  
ージだけ抜いたということもあり  
得なくはないが。既に空は白みがか  
っていて、星が見えにくくなってい  
る。この広い世界の中で、ぽつんと  
取り残されたガラス瓶。海も、空も、  
朝の表情を見せ始めている。瓶を取  
ろうと、ゆっくりと手を伸ばす。し  
かし、瓶の上部に触れたところで、  
なんだか疲れたような、面倒くさい  
ような気がしてしまい、手に取るの  
をやめてしまった。体を元に戻して、  
目の前の世界をぼーっと見てみる  
と、先ほどまで綺麗に見えていた海  
も空も、どうでもいいような感じが  
してしまった。水平線の向こうを見  
ながら、ホテルに帰ろう、と思った。

に瓶が突き刺さっているのが見え  
た。メッセージボトルかと思ったが、  
近寄ってみると中身が入っていな  
かった。おそらくただのガラス瓶な  
のだと思われる。誰かが中のメッセ  
ージだけ抜いたということもあり  
得なくはないが。既に空は白みがか  
っていて、星が見えにくくなってい  
る。この広い世界の中で、ぽつんと  
取り残されたガラス瓶。海も、空も、  
朝の表情を見せ始めている。瓶を取  
ろうと、ゆっくりと手を伸ばす。し  
かし、瓶の上部に触れたところで、  
なんだか疲れたような、面倒くさい  
ような気がしてしまい、手に取るの

真冬の海に吹く、突き刺してくるような冷たい風は、私を見る両親の突き刺すような視線とよく似ている。

耳の中をくすぐってくるような、さざめく波の音は、家の中で飛び交う両親の罵声と同じ不快感を与えてくる。

夏場は胸焼けしそうなほどの活気に満ちているこの海も、冬になれば閑古鳥かんこどりの鳴き声はつきりと聞こえてしまうほどに寂れている。誰の足にも荒らされていない真っ白な砂浜は、夕焼け空を反射してキラキラと輝いていた。

吹き付ける風は相変わらず冷たくて、私の長い髪をグシャグシャにかき乱してくるけど、元々髪なんてセツトしてなかったから、気にすることなく浜辺へと歩いていく。

何の防寒具もつけていない学生服姿では、どうやら真冬の海の寒さに耐えることは難しいらしく、私の体は今までにないくらい激しく震えている。

鼻から入ってくる空気が、私の体を内側から凍らせてきて、心も体も芯から凍っていくようだった。だけど、私はそれすらも気にしていない。

だって、私の心も体も、すでに冷たく・固く凍り付いてしまっているから。

一步、一步と浜辺に近づいていくたびに、サラサラだった砂浜が徐々に水気を帯びていき、私の足跡がより鮮明に砂浜に残っていく。

引き潮に濡れた砂浜は、まるで鏡のようで、もしかしたら今私が立っているこの世界が偽物で、砂浜に映る世界の方が本物なんじゃないか、と錯覚させるほどに美しく世界を映していた。

ちゃぶ……ちゃぶ……と、次第に一步が奏でる音色が瑞々みずみずしく変わる

っていく。

ちゃぶ……ちゃぶ……

ちゃぶ……じゃぶ……

ザバ……ザバ……

足先が完全に海水に吞まれ、低温のせいも完全に感覚が無くなっている。

それでも、私は歩みを止めることはなかった。

ザバ……ザバ……と、一步を踏みしめるたびに体が海水に吞まれて行く。感覚が徐々に失われて行く。

ほんの少し、恐怖はあったけれど、今更引き返そうなんて思わない。

「やめておきなさい。うら若き少女

よ」

波の音に紛れて、小さく、それでいてどこか自信に満ちたような男の声が聞こえた気がした。

私以外にこの浜辺に人がいないことは確認済み。私を止める声なんて聞こえるはずがない。

だけど、確かに聞こえてきた声の正体が気になって、周囲を見渡してみられるけれど、人影はまったく見当たらない。

幻聴……かな？

まったく、幻聴が聞こえてしまうほどに追い詰められていたなんて。

早いところ終わらせなくちゃ。

「おーい、お嬢さん。聞こえているかい？」

やっと終わる。やっと終わらせられるって時に。

「今振り返ったよね？ 僕の声、完全に聞こえてるよね？」

こんな変な幻聴に耳を貸しちゃダメ。私は、もう……

「人の話はよく聞くものだよ。いいからその歩みを止めなさい」

私、は……

「おーい！ 聞こえているんだろ？ おーい、おーい」

「ああもう!! うるっさいわね!!」  
一向に鳴りやむことのない幻聴

にイライラが収まらず、思わず文句を言ってしまった。

末期だ。幻聴に文句を言うなんて、いよいよダメだな私。

「やっと、返事をしてくれたね」

コンコンッと何か固いものを叩く音が聞こえた。

ゆっくりと視線を音のした方に落としてみると、そこには波に流されたのであろう一つの綺麗なガラス瓶が置いてあった。

日光に照らされて表面が輝いているからよく見えないけど、中に何かが入っている。

来た道に戻ってガラス瓶を手に

取ってみると、そこには異国の王子様のような恰好をした、金髪の美青年の人形が入っていた。

「やあ、僕の名前はアレックス。君の名前は？」

「さ……齋藤、梓です」

あまりにも流れがスムーズすぎて、自然と自己紹介をしてしまった。私が拾ったガラス瓶の中には、人形のような王子様が入っていたのだ。



「さて、梓さん……だったかな？」

「はあ……」

ガラス瓶の中に入った自称王子様、アレックスを拾った私は、いったん海から出て砂浜に座り、アレックスの話を聞くことにした。

足先が海水に濡れているせいで、吹きつける風の冷たさがより鮮明に体に伝わってくる。

先ほどまで無くなっていた足の感覚も徐々に戻ってきていて、靴の中の濡れた靴下がぐちよぐちよと指先に気持ちの悪い感触を与えてくる。

「梓さん。君、なんで死のうとしてたんだい？」

アレックスは、何も躊躇ちゆうちよする様子もなくストレートに疑問と飛ばしてきた。

「……どうして、私が死のうとしていたと思ったの？」

「真冬の海に女性が一人、沖へ向かって歩いている。誰が見たって死のうとしているようにしか見えないさ」

確かに、私は死のうとしていた。海で入水自殺なんて苦しさしか残らないような自殺方法を選ぶなんて、私も物好きよね。

「それに、君のそのやさぐれた表情が『今から死にますね』とはつきり

と申ししていたぞ」

などとキザな顔で言ってくるアレックスに、無性に腹が立ってくる。

「梓さん。君はまだ若いだろう？」

君の未来はこれからじゃないか。どうして死のうとするんだい？」

アレックスの問いを聞いて、私は嫌でも今までの記憶を思い出してしまう。

吹き付ける風がより一層強まった気がして、体がガタガタと悲鳴を上げるように震える。上の歯と下の歯が、ガチガチと音を立てて小刻みに衝突する。

こんな話をアレックスにしたと

ここで、何も変わらない。

だけど、なぜだか無意識的に言葉を紡いでいた。

「うち、親がすっごく仲が悪くてさ。毎日毎日喧嘩ばかり。お父さんはすぐに暴力ふるってくるし、お母さんは私に理想ばかり押し付けてくるし。もう、そんな生活疲れちゃったの」

この十七年間、お母さんとお父さんが仲良くしている姿を見た記憶はない。

毎日のように起こる喧嘩は、私が止めないと事件になりそうなくらい激化するし、私がいなかったら二



人はもうとっくに離婚しているだろう。

一応、親には育ててもらった恩があるから今まで何とか二人の仲を保つように努力してきたけど、それももう疲れてしまった。

「だから、もう楽になりたいの。お父さんとお母さんには悪いけど、私にはもう耐えられないから」

私がいなくなったら、二人はどうなってしまうのかな？

自分たちのせいで娘が死んだとなったら、さすがに反省して仲直りしてくれるかな？

それとも、対して気にすることな

くいつも通り喧嘩ばかりするのかな？

仲直り……してほしいな。

「……梓さんは、とっても優しいんだね」

「え？」

ガラス瓶から聞こえてきた柔らかい声に少しだけ驚く。

私の目に映ったアレックスは、今までのキザでムカつく表情が一切感じられない、どこか温かい、優しい顔をしていた。

「君は今、親のために死のうとしていたんだろう？ 自分が死ねば、反省して父親と母親が仲直りするん

じゃないかって。顔にそう書いていた」

そう言い当てられて、私は驚き身を引いてしまう。

「この寒い時期に海での入水自殺

を選択するのも妙だ。きっと、君なりにできるだけ周りに迷惑をかける方法で死のうと考え、導いた答えなんだろう？」

これまた凶星を突かれ、私は思わず逃げるように顔を俯かせた。

事故による自殺、投身自殺、焼身自殺、自傷行為。

ひとえに自殺と言っても、方法は

いくらかもあるし、入水自殺よりも

楽な死に方なんていくらでもあった。

でも、そのほとんどが周りの人や

交通機関、環境に影響を与えるもの。

自分の死体を他人に見せてしまう

可能性があり、精神的なショックを

与えてしまうかもしれないなど、周

りに迷惑をかけてしまうものばかり

りだった。

海での入水自殺であれば、交通機

関などに影響を与えることもなく、

うまくいけば私の死体を誰も見る

ことなく死ぬことができる。

私は、死ぬときにまで周りに迷惑

をかけたくなんて思えなかった。

「君は優しい。そんな優しい君が死ぬなんて、<sup>じつ</sup>実にもったいないことだよ」

よ」

この人は、私の心を本当に見透か

してしまっているのだろうか？

「だから、僕が君の王子様になって

あげよう」

「……は？」

先ほどまでの優しい表情がはが

れ、再びキザでムカつく表情に戻っ

てしまった。

「僕が君の王子様になって、君に救

いの手を差し伸べてあげよう。どう

だ？ 嬉しいだろう？」

生意気に笑ったその表情はやつ

ぱりムカつくけど、やっぱりどこか温かい。

「……私、王子さまは高身長でイケ

メンじゃないと受け入れられない

んだけど？」

「何を言うか！ 身長が低いこと

は認めざるを得ないが、顔はイケメ

ンだと自負しているぞ！」

あまりにも自信満々に告げるア

レックスの姿が妙に面白くて、私は

思わず吹き出してしまった。

笑うでない、と小さい体で抗議し

てくるアレックスの姿を見て、私の

笑いはさらに加速していく。

夕暮れの海は、まるで鏡の中の世

界のように美しく輝いていて、冷たい風が私の頬を優しく撫でていく。

私の体は、もう震えることを忘れてしまっていた。